

<b>Title</b>	H.G.アンダーウッド宣教師と韓国そして日本
<b>Author(s)</b>	松本, 周
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.3 : 12-14
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3537">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3537</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# H.G. アンダーウッド宣教師と韓国そして日本

松本 周

## はじめに

今夏、日韓キリスト教交流史の資料調査および語学研修のために、筆者は韓国ソウル滞在の機会を得た。本稿では、韓国プロテスタント伝道の最初の宣教師Horace Grant Underwood（以下、アンダーウッド宣教師と表記）と韓国、日本との関わりについて学んだこと、また今後の本格的な研究に向けてのノートとして所感を記したい。

## 1. セムナン教会—アンダーウッド記念学術講座

2011年9月3～4日、第48回アンダーウッド記念学術講座が開催された。たまたま筆者の滞在期間中であつたので、幸いにも開会礼拝から最後の交流会に至るまでの全プログラムに参加することができた。同講座はセムナン教会の創設者であるアンダーウッド宣教師を覚え、その名を冠して毎年開催されている、セムナン教会主催の学術講座である。その年毎に主題が定められ、主題についての第一線の研究者を韓国内のみならず国外からも招く形で、講演・ディスカッションのプログラムが計画される。そして驚かされたことに、企画・進行にかかわる多くの部分が、20代30代の教会青年の奉仕によって担われていた。

本年の主題は「時代の使命に沿うキリスト者」と掲げられ、筆者の理解したところでは、公共神学、現代社会に対して教会また信仰者の負うべき社会的責任について、深く論じられた。

特にその時代的使命については、北東アジアの現代社会をふまえる観点から韓国・中国・日本について、それぞれ講演者が立てられ、またコメンテーターも3ヶ国の青年が務めた。日本からの講演者は聖学院大学総合研究所の深井智朗教授、また韓国の講演は長老会神学大学校のイ・ミグク教授がなされ、筆者にとって以前から存じ上げている先生方である上、講演内容も興味深くうかがった。今回取り上げられた3ヶ国をとってみても、

各国の「ナショナリズム」と教会との関係はそれぞれに独自であり、その中で共通性を有する「教会の時代的使命」を語り得るかどうかは、筆者自身の研究領域であるキリスト教社会倫理とも関係して、知的刺激を与えられたプログラムであつた。そしてこれほどの規模の学術講座を教会が開催するというところに、韓国における教会の社会的力強さを感じさせられた。

## 2. 延世大学校

資料収集の関係で訪問した延世大学校の創作者もまたアンダーウッド宣教師である。新村キャンパスの正門から一直線のメインストリートの先にアンダーウッド宣教師の銅像が建っている。



アンダーウッド像

現在の銅像は3代目とのこと。初代の銅像は日本支配時代に戦時の金属供出のため取り外されてしまった。1945年光復後に再建された銅像は、朝鮮戦争時に北朝鮮軍が「アメリカ帝国主義の象徴者」として取り壊してしまった。このアンダーウッド像を巡る変遷に、韓国近現代史が凝縮されている。

そして銅像と日本とのかかわりはこれだけではない。朝鮮総督府は初代の銅像を取り外し、その代わりとして「興亜維新記念塔 朝鮮総督南次郎書」と彫った石碑を置いた。現物がキャンパス内



「興亜維新」碑

に保存されている。

案内してくださった山本文氏（延世大学院 神学研究科博士課程生）は、石碑の裏面に「昭和六年一二月八日」と日本による真珠湾攻撃の日が刻まれているという氏の発見も紹介してくださった。

また延世大学校構内にはアンダーウッド宣教師一家が暮らしていた家が保存され、内部は資料館になって公開されている。

建物内に入っすぐのところに、アンダーウッド宣教師が作成した韓英辞典が展示されている。初代の宣教師は皆、現地語の習得から活動を開始している。この点、日本で『和英語林集成』を編纂した宣教師ヘボンとの並行関係が目される。館内にはそのほかにも当時の宣教活動を窺い知ることのできる様々な資料が展示されていた。

アンダーウッド宣教師の子・孫の活動も紹介されているが、そこでも韓日の近現代史と深く関わる出来事が存している。ソ・ジョンミン氏の著作から引用、紹介したい。「원한경〔注：アンダーウッド宣教師の子息〕は、三・一運動の時の大日本帝国による民間人虐殺と教会弾圧を目撃し、日帝に対して大きな警戒心を持つようになった。彼は堤岩里教会をはじめとするスチョンリ、ファス



アンダーウッド記念館

リなどの虐殺事件を直に調査し、そこで得た知識をまとめ、世界のマスコミと教会の機関に送って大日本帝国の蛮行を糾弾する最先鋒にも立った。」（서정민 『언더우드家이야기』 살림出版社、2005年。訳文は김민경氏による。）

1919年当時の世界情勢下にあって、韓国と日本また米国との関係の中で苦闘し行動する宣教師家族の様子が伝わってくる。ここにもアンダーウッド宣教師と韓国そして日本とのかかわりがあった。

### 3. 今後の研究—世界動向と各国という視点

以上、記してきたことはアンダーウッド宣教師と家族を通して浮かび上がる、近現代史上の諸事件であった。これらの史実は以前から知られていたし、研究も少なくない。しかしそれは韓国キリスト教史、日本キリスト教史、国際政治史といった各々の個別領域での研究にとどまっていたのではないだろうか。

しかし北東アジアにおけるキリスト教史、その各国での展開を捉えようとする場合、従来の各国別また専門分化の研究では全体像を把握できない。その意味では「学際的」、しかし単なる寄せ集めにならないための「総合的」視点を有した研究への展開が必要である。

先に、ナショナリズムと教会との関係が韓・中・日の3カ国で相違すると述べたが、この点な



長老会神学大学校の理念「敬虔と学問の殿堂」の碑  
～Pietas et Scientia～奇しくも聖学院大学と共通の理念を掲げている。

どはその好例である。19世紀に行われたプロテスタント伝道は〈自治〉〈自養〉〈自伝〉といったいわば共通のスローガンを有していた。けれどもそうした教会が、各国の政治的・社会的状況とどのように結合し、また歴史の中でスローガンの意味が解釈され、受容される中で各国の教会は異なる性格を有していった。韓国は民族独立運動と教会が結びついていった。中国には現在「三自愛国」教会が存在している。日本は「国民的自由教会」（熊野義孝）といった呼称を生み出していった。これらの全体把握は政治史とキリスト教史のどちらを欠いても不可能であり、また各国別研究では不十分である。

今後の研究に取り組むにあたって、韓国・長老会神学大学校と聖学院大学との交流は重要な意味がある。前述のセムナン教会も属する大韓イエス教長老（統合）派の神学校である長老会神学大学校は、韓国最大の神学大学・大学院である。（それは世界最大級を意味するとも語られる。）韓国と韓国キリスト教界を代表する研究機関とこうした学際的かつ総合的な共同研究をなすことは、現代および将来に研究を通して奉仕することにつな

がると考えている。

最後に加えておきたいことは、教会と大学との二つが結びつきをもって存在していることの重要性である。韓国におけるアンダーウッド宣教師の宣教活動を通して、教会が立てられ大学が設置された（また医療活動も行われた）ことと、日本でヘボン宣教師が教会と大学に連なる働き（また医療）をなしたことは、決して偶然の一致ではない。「キリスト者の時代的使命」がそのような形で果たされたということである。この点でも、Pietas et Scientia（信仰と学問）が長老会神学大学校と聖学院大学とに共通したスクールモットーであることは喜びである。

（まつもと・しゅう 聖学院大学総合研究所助教）